

2012・05・04

保育感情労働研究会通信 第2号

NPO法人さやま保育サポートの会

保育サポート研究所 04-2957-0451

未曾有の災害となった3・11東日本大震災。地震と大津波と福島原子力発電所の放射能汚染。トリプルパンチを受けて、わが国の自然も社会も暮らしも一変してしまいました。ようやく復興計画が出揃ったものの、その道のりはまだまだ不透明です。私が支援にかかわっている宮城県・南三陸町でも、どの高台に住むことを希望するかを調査している最中に、遺跡が発掘されてその計画も練り直し…とかで、保育園建設計画もいまだ見通しがたたない、ということです。震災をきっかけに人々が確認しあった“絆”の大切さを胸に、お互いに助け合って行きたいものです。

ところで保育の感情労働研究会の支えあいや助け合いは、さまざまな形をとって展開しています。研究会会員は37名と大所帯になっていますし、その中で当研究会を出会いの場として、望月科研などのメンバーとなって新たな研究グループに入っていき方々も出ています。当研究会の課題としては、第2版に漕ぎ着けた『保育における感情労働』をどのように広げ、深めていくかだと思います。

戸田さんは、アンケートに協力してくださった方の中から抽選でこの本を差し上げていると聞きました。私は、昨年10月26-28日に開催された全国私立保育連盟（全私保連）の「保育実践セミナー」で「保育における感情労働—保育者の専門性を考える視点として—」と題して保育園の方々に向けてお話しする機会を得ました。さらにこの2月には、全国保育士養成協議会北海道ブロック総会で保育士養成校の先生方を対象に「保育者養成と保育者の感情労働—保育者の保護者支援役割を中心に—」と題して講演をさせてもらいました。このようなタイトルでの講演はまだまだ十分こなれていませんので緊張しました。

これらの講演は、全私保連研修部の方々や大学の先生方が『保育における感情労働』を手にして興味を抱いてくださって実現したものでした。この秋にも同じ「保育実践セミナー」（10月31日～）で第2弾をとお勧めをいただいています。こうした会を重ねて思うことは、「保育の感情労働」の普及・発展に当たっては、研究会を通してある程度の合意形成に努めていく必要があるように思います。その方法の一つとして、初日に神谷哲司さんと諏訪との対談をお願いしてみました。研究会の研究成果をベースに保育実践に返すことが出来るよう、誠実に一步一步を積み上げていきましょう。（文責 諏訪きぬ）

新会員からのメッセージ 太田光洋@和洋女子大学です。経歴で自己紹介しますと、宮城教育大→幼稚園教諭→宮教大（院）→旭川大学女子短大（シンガポール国立大研究員1年）→旭川大学附属幼稚園長3年→九州女子大→和洋女子大と全国を転々としてきましたが、保育はどこに行ってもおもしろいものです。宮教大では野呂正先生の下で、主に遊びの心理学について学びました。いまでも遊びと子育て支援には関心を持ち続けています。感情労働については自分が20代の頃に感じていた幼稚園がもつ風土というか雰囲気の中で、研究対象として扱いたいと考えていたことでした。社会学的な観点に面白さを感じている中で出会ったのがホックシールドの『管理される心』、パム・スミスの『感情労働としての看護』であり、「切り口を見つけた」と思ったものです。これをどう保育に生かすかは難しい課題だと思いますが、個人的な感情の問題が強調される近年の傾向に対して、組織や集団といった枠組みや文化が個人や感情を規定していくという観点は大切な切り口だと思っています。また、保育者が自分の感情を対象化することによって、保育者の仕事の専門性が見えてきたり、養成における感情管理や保育者の他者（子ども、保護者、同僚）との関わりのあり方も変更できるのではないかと考えています。どうぞよろしくお願ひします。

日本発達心理学会 ラウンドテーブル：“保育者養成からみた感情労働”

2012年3月9～11日に行われる日本発達心理学会第23回大会で「保育者養成からみた感情労働」をテーマにラウンドテーブルを行いました。また5月4～5日にある日本保育学会第65回大会では、保育者のストレスをめぐって自主シンポジウムを行います。ラウンドテーブルで報告された方々のまとめをお知らせいたします。

「保育者養成における感情労働」今後の課題について

高橋真由美（藤女子大学）

日本発達心理学会第23回大会では、保育者の一般的なイメージであると思われる「明るい」「元気」「笑顔」に焦点をあて、あるべき養成の姿を感情労働という視点を交えながら考えるというラウンドテーブルを行った。ラウンドテーブルを行って感じてしたのは、「笑顔」の捉え方が人それぞれ多様であるということである。保育の営みにおいて、保育者の笑顔は大切か？と問うた時、「非常に大切」だと答える者もいれば、「笑顔以上にもっと大切なものがある」と答える者もいるだろう。もちろん、「笑顔以上に大切なものがある」と答える人も、「保育者に笑顔は必要ない」とは思っていないだろう。おそらく、「笑顔」という言葉の捉え方が人それぞれであるため、このような回答の差がみられるのではないか？と思うのである。こう考えるとこの議論をする際には、保育者に必要な「笑顔」とは、どういうものか？必要とされる「笑顔の質」というようなものを共通認識するための議論が今一度、必要なのではないかと感じた。

私は、学生が保育者の笑顔について、どう捉えているのだろうか？を探るため、昨年度に幼稚園実習を行った学生のレポートから、「笑顔」「明るい」「元気」な態度について触れられている箇所を抜き出してみた。すると「先生が笑顔でいると子ども達が楽しそうにしていた」というように、保育者の笑顔が子どもの活動に影響を与えるのだということを、先生方の様子を見ること、自分が実践してみて実感することから学んでいたりと、「子どもが意欲や自信を持てるように笑顔でほめる。言葉だけでなく、表情で子どもに伝えることや感情を子どもに訴え伝えることも、子どもの学びとして大切なこと」など、保育者の笑顔が子どもの成長発達に大切なものだということを感じている等の様子が垣間見られた。しかしながら逆に、「笑顔で明るい態度」を求められ、非常に苦労したという内容の記述も見られた。この違いがおこる要因はどこにあるのだろうか。学生の気質も要因の一部かもしれないが、指導のされ方や実習園自体の体制にも大きな要因があるように思った。「笑顔」を切り口にして、学生達がどのような指導を受け、どのような経験をするのが、より良い実習経験となるのだろうかということ、養成校と現場に勤務するメンバーがいるこの研究会で今一度、語り合うことができればと思う。

自主ラウンド『保育者養成にみる感情労働』を終えて

上月 智晴（京都女子大学）

3月11日、発達心理学会（名古屋）において、『保育者養成にみる感情労働』をテーマに自主ラウンドテーブルが行われた。今回のラウンドは、昨年出版した『保育における感情労働』シンポ5「保育者養成の窓から見た感情労働」の議論を、さらに深めていこう（広げていこう）という主旨で企画され、私は話題提供者の一人として登壇した。私が報告した内容は大きく二つ。一つは保育園・幼稚園の実習において、実習生がことさら「笑顔で明るい態度」を求められているという事実。もう一つは、現職保育者自身の職務としての「笑顔」意識である。

前者では、『保育における感情労働』シンポ5のトピックでまとめた前任校のデータに加えて、他の養成校のデータも紹介しながら、実習生が「笑顔で明るい態度」を評価される背景に、対人関係に弱さを抱えていたり、元気だけが取り柄であったりという学生側に起因する問題と、そうでない問題（「保育者の

常套句)があることを述べた。(さらに太田先生からは「実習生が安心して実習できる環境(実習園)かどうかというコメントもあった。)後者は、現職保育士への質問紙調査をもとに行った考察で、常套句としての笑顔の全容を明らかにしたいと思って取り組んだ研究で、多くの保育者が職務として笑顔を意識していること、それは保育キャリアの長い人ほど強く、また職務の違い(園長・幼児担任・乳児担任)によって、子ども・保護者・同僚・上司に向けた笑顔意識の強さも微妙に異なり、笑顔になる理由も、子ども・保護者の安心感、楽しい生活、心地良いコミュニケーション、保育者自身の元気、明るい職場をつくるためなど、幼い子どもに長時間かかわり、保護者を支え励ます仕事だからこそ求められる要素だということ

ことを述べた。

一方、少数意見ではあったが、「自然に笑顔になっている」「私達はサービス業、いかなる時も笑顔は基本、意識せずとも…」という声もあった。「自然」「無意識」という笑顔が、深層演技を指すのかどうかは定かではないが、「サービス業だからいかなる時も」と言ってしまうのは、保育労働を単純化させてしまう危険性を感じる。こども未来財団の量的調査班の調査でも、「楽しさ」や「嬉しさ」というポジティブ感情の表出頻度(特に「素直な表出」)は高かったが、「悲しみ」や「怒り」というネガティブな感情も、表出頻度こそ少ないが、擬態したり、誇張したり、時には素直に表出したりと、保育者は微妙な感情コントロールを行っている様子うかがえた。

保育は、実に複雑な感情コントロールの求められる仕事だとあらためて実感する。笑顔で明るい態度だけでなく、悲しみや、怒りなどのネガティブ感情も含めて、保育に求められる感情労働やその養成のあり方について、さらに追求していきたい。

「笑顔」について

小川 房子(明星大学)

保育現場にいた頃は、「笑顔」についてそれほど深く考えたことはない。きっとそれは、子どもと一緒にいる幼稚園生活の様々な場面で「楽しい」「嬉しい」と感じている感情が表出されるものが「笑顔」であり、私にとっては特に身構えてつくるものではなかったからだろう。だから内面にある感情と外面に表出された表情とを切り離して考えることさえしていなかったと思う。ところが、養成教育に携わるようになって私の中で「笑顔」がクローズアップされるようになった。その理由は二つあると考える。ひとつは、実習の評価票で「笑顔」の文字を目にすることが多く、実習後の学生の感想にも「笑顔」という言葉がたくさん用いられるからである。もうひとつは、学生が感情と笑顔を切り離しているかのように「つらくても笑顔で頑張る」や「こどもの前ではどんな時も笑顔でいる」などということ、実習の目標に挙げることが気になっているからである。特に後者が気になって仕方がない。なぜなら、感情と一致した表情は「質としての笑顔」であるが、学生が目標として挙げるのは感情から切り離された「量としての笑顔」であって、全く異質の「笑顔」であると思えるからである。

ではなぜ、学生は実習の目標として「笑顔」を挙げるのだろうか。①保育者としてのイメージ②子どもの前で「笑顔」でいることが難しいことであるから③評価票にも表れているように過去の実習でどんな時にもたくさんの「笑顔」を求められたから…など、いくつかの理由が考えられる。この②③は保育の場にふさわしい「質としての笑顔」ではなく「量としての笑顔」ではないだろうか。

これらのことを考えると、私の中で「笑顔」は無意識に近いものであると思っているけれど、保育における「笑顔」には無意識では片付けられないさまざまな要因が潜んでいて実に奥が深く、さまざまな背景があるように感じられる。また、感情労働の視点で考えると「質としての笑顔」ではなく「量としての笑顔」を強く求められる保育現場では、保育者が感情労働をする割合も高いのではないかと推察できる。日

本発達心理学会のラウンドテーブルで話題提供をさせていただき、私の中でさらに「笑顔」がクローズアップされている。そして、指定討論の太田先生の「誰に向けられる笑顔なのか？」という問いをもっと深く追求してみたいと考えるようになった。「質としての笑顔」と「量としての笑顔」は異質だけでなく、向けられる対象も違う場合が多いのではないかと思う。

この「笑顔」を丁寧に整理しながら、感情研究会の場で皆さんと議論してみたい。特に私は「質」と「量」の違いにこだわって「笑顔」について掘り下げてみたい。

「実習生の笑顔」をめぐる議論から

太田光洋（和洋女子大学）

実習生に求められる「笑顔」や「明るさ」は、保育者のイメージと直接結びつく。そのことが笑顔が特に重視される一つの要因といえるでしょう。しかし、笑顔や明るさがなぜ求められるかといえば、それが子どもの側から見て親和的、受容的に映るからであり、子どもの感情を高めるからではないでしょうか。

ある養成校の実習生が保育者に注意されている場面でも笑顔でいて、訪問にいった教員が叱られたという話を聞いたことがあります。極端な例ですが、力のない学生が実習をやり過ごすひとつの方法だったのだと思います。

このように考えると、他にも保育者として大切なことがあるにもかかわらず笑顔だけが強調されることが問題といえるのではないのでしょうか。保育者にはやはり笑顔は必要なのだと思います。

養成段階での問題として、①自分の感情を対象化して、それを場面や状況にふさわしいかたちで表現する経験や学び、②学生が学ぶための教育プログラム開発やしくみが必要であると思います。①のためには、子どもの側の視点に立って保育者としての自分やその感情表現を捉えることが必要です。その第一歩は学生自身が子どもと同様の体験をし、その喜びを味わうことであるかもしれません。また、実習の終わり頃に話し方や雰囲気は指導保育者に似てくる実習生がいます。こうした学生の変化に注目するのもおもしろいと思います。このような実習生は「表層演技」として指導保育者のやり方をまねるうちに、「深層演技」へと転化しているように思われるからです。それを明らかにできれば、学生を育てるプログラムにも生かせるのではないのでしょうか。保育学生を育てるには、実習での目標を明らかにすることはもちろんですが、その中に保育者自身が自分の感情を対象（子ども、保護者、同僚）に応じてどのように取り扱うかを学ぶことも含まれるべきです。同時に、実習生を育てる保育現場や養成校などがどのような意図を持って、教育環境を構築するかも考えられねばなりません。これは保育環境をつくる管理職の役割であり、保育の世界ではあまり注目されてこなかった点でもあります。保育学生の学ぶ環境システムという点では大きな力として働いていると推測されます。

保育者の笑顔についての議論は十分に深められたとはいえませんが、以上のようなことを考えながら議論を聞いておりました。

ラウンドテーブル「保育者養成における感情労働」を拝聴して 神谷 哲司（東北大学）

元より私は鳥頭なので、当日の論点をまとめることもできないし、総論として何かを語ることもおこがましい。しかしながら、諏訪先生よりご依頼いただいたこともあり、当日私が発言したことの補足も含めて、現時点で「保育者養成における感情労働」について思うところを述べさせていただきたい。

議論のなかで気になったのが「素の自分」という言葉であった。記憶が確かであれば、実習生が自分の「素」の部分を出すことは悪いことではない、という論調が出されていたと思う。確かに、ただでさえ実習で緊張している実習生が、「素の自分」を隠して保育者然として子どもたちの前に立てるとは思えず、

その実習生なりの「素の部分」を出しながら、「その人らしい」保育者像を模索することは大事なことだろうと思う。

しかし、一方で実習生は、養成校でさまざまなことを事前に学習してくるとはいえ、「実践」という意味では経験も圧倒的に少ないし、現場における経験智のようなものはほとんど有していないといえる。だからこそ、養成校において「現場」での実習が重視されているといえるだろうが、そのような「実習生」は、経験智に欠けるという意味でまだ「真っ白」であり、「素」の部分があるように思える。

すなわち、実習生の「素の自分」といった場合、ひとつにはその実習生のパーソナリティの側面について言及する意味合いがあり、もうひとつには現場での経験が少ない「素人」としての意味合いがあるのではないだろうか。両者は実態として必ずしも独立ではないだろうが、しかし、この二つを分けて考えることは重要なことであるように思われる。

RT では通して、「笑顔」の表出をめぐる議論がなされていたように思う。これを上記の2側面から考えた時、「笑顔が見られない」実習生はそうしたパーソナリティを有しているのとらえられるのか、それとも、保育者としての「素人」としてとらえられるのか。後者であるとしたら、なぜそのような判断が実習園でなされるのだろうか。「明るく、朗らか」なパーソナリティが保育者役割のステレオタイプとして認知されている現状において、そのようなパーソナリティを備えることが実習生に求められているといえるのだろうか。ステレオタイプではない、ひとりひとりの実習生らしさに基づく「笑顔」はそこでは求められないのであろうか。

「笑顔」のなさが緊張の証として受け止められ、そのことで「素人」であることを明示してしまうことは致し方ないことだと思える。ではそうした実習生に対してどのような指導が必要なのだろうか？そのことを突き詰めていったとき、恐らく、「場数を踏む」だけでは説明のできない「経験智」による「笑顔の表出」のヴァリエーションがあるような気がしてならない。

新会員からのメッセージ

はじめまして。園田学園女子大学短期大学部の林富公子と申します。今年3月の発達心理学会で諏訪先生に感情労働研究会に誘っていただきました。諏訪先生、ありがとうございます。私は私立幼稚園勤務の後、大学院へ進学し専門学校などの勤務を経て、現在の職場に助教として所属しています。学校では、保育実習、保育内容人間関係、保育者論などを担当しています。幼稚園勤務時に、大学時代の友人が研修期間中に退職したことに驚き保育者のストレスに興味を持ちました。現在は、保育実習におけるストレスと職業選択にも興味があります。時間の許される限り、勉強会などにも参加したいと思っています。皆さま、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

はじめまして。京都文教短期大学の鳥丸佐知子と申します。神谷先生や戸田先生との思いがけないつながりから、ここへたどり着きました。とても嬉しく思っています。よろしく申し上げます。私は遙か昔、某大学の国文科の出身です。その後、某銀行に勤務。結婚、出産を経て、下の子が小学生になってから大学院に進学しました。子どもふたりは年子で、上が26才男、下が25才女。ともに社会人です。というわけで年齢と体重ではかなり上になるのでは？と思います(笑)。大学院の修士課程修了後は、発達相談員や児童相談所の相談員などで主に母子臨床に関わっていましたが、その後、いくつかの非常勤を経て、現在は保育士養成校である本学で『発達心理学』『教育心理学』などを担当しています。研究会でみなさまにお会いできるのを楽しみにしています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

